

大型チェンバロの音域例



わすか数ミリの爪が貴族たちを魅了した。バロック時代の人気楽器、チェンバロ。



チェンバロは14世紀末に誕生したといわれています。リュート、ハープなど、弦をはじく音色の美しさは昔から人々に愛されてきました。これに鍵盤をつけたものとして登場したチェンバロは弾きやすさも手伝ってまたたく間に普及。バロック時代(17世紀～18世紀前半)に全盛期を迎えます。当時、公の場の鍵盤楽器といえば教会のパイプオルガンで、建物と一体化した大規模な楽器でした。それに対して貴族たちが催したサロンのような親密な空間で、繊細に、また時に大胆に奏でられる、オルガンとは異なった魅力を味わえる身近な楽器として重宝されました。

ピアノと同じ鍵盤楽器。音の出るメカニズムは異なります。

イタリアやフランドル地方、フランス、ドイツなど西ヨーロッパに広まったチェンバロは様々な形のもが作られました。英語ではハーブシコード、仏語ではクラヴサンと呼ばれます。スピネットやヴァージナルと呼ばれる小型のチェンバロも好まれました。鍵盤が1段のものあれば右図1のように2段のものもあります。これらは形も大きさも様々ですが、木の箱に弦が張られ、それを“はじいて”音を出す、という仕組みは共通です。18世紀半ばから広まりだしたピアノも、チェンバロをベースとして発明されたのです。しかしピアノはハンマーで弦を“打って”音を出します。そこでチェンバロは撥弦楽器、ピアノは打弦楽器と区別されます。

チェンバロは、“爪”で弦をはじき、振動させます。

この“はじく”という動作を、道具で行うのは実は意外と難しく、当時の製作者がたどり着いた方法は図2のようなものでした。鍵盤のそれぞれの鍵の上に木片(ジャック)が乗っていて、先の方に微妙なしなやかさを持つ小さな“爪(プレクトラム)”がついています。この“爪”で弦をはじきます。弦に生じた振動は、ブリッジを通じて響板に伝わり、響板と透かし彫りを施した響孔(ローズ)が弦の振動を効率よく空気の振動に変換し、しっかりと聞き取れる音量に拡大します。

すこし知ると、うんと楽しい ローム クラシック Vol.6

クラシック音楽と科学。一見、無縁のようですが、クラシックの演奏に欠かせない楽器や、愛されつづける名曲には、科学で解明したくなる、不思議な世界があるのです。少しのぞいてみましょう。クラシック音楽がもっと楽しくなりますよ。



さらに複数の弦、その組み合わせで独特の音を作ります。

よく見かける2段鍵盤のチェンバロの場合、上・下の鍵盤の各鍵にそれぞれ1本ずつ弦が張られ、さらに下鍵盤の各鍵にはオクターブ高い弦も張られています。ストップというつまみを動かし、弦をいろいろに組み合わせで演奏します。またカブラーと呼ばれる装置によって、上下の鍵盤を連動させ音を出すことができるなど、複数の弦をさまざまに融合させたり使い分けて音色を作り、音量を変化させます。打弦により音量を変えるピアノと異なる点です。大型のチェンバロでは約5オクターブの音域を持つのが一般的。またチェンバロには美しく協和する音が多く含まれ、柔らかく澄んだ、しかも深い余韻のある音色が特徴です。

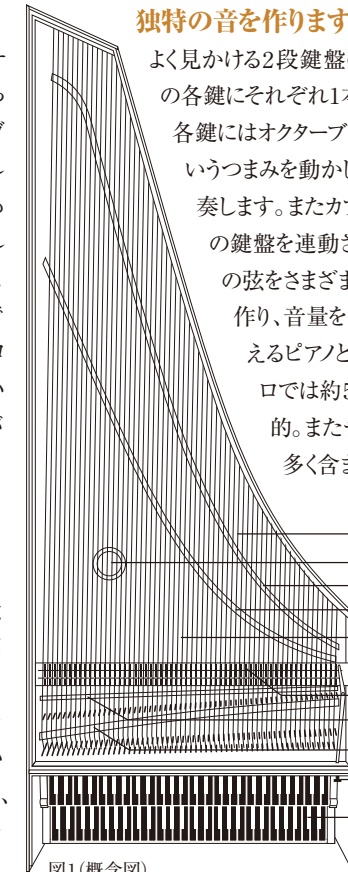
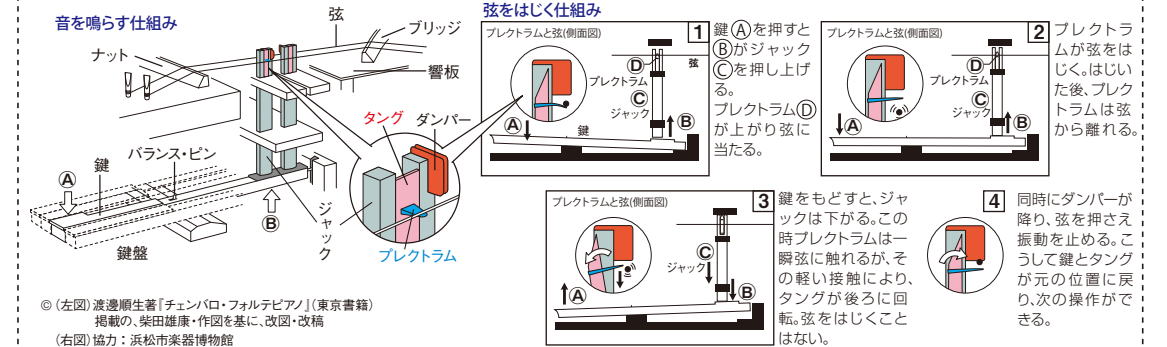


図1(概念図)

プレクトラムは、かつては鳥の羽軸を使っていましたが、今ではプラスチック製が一般的です。低音部の弦には真鍮製、中・高音部の弦は鉄製を使用し、響板は糸杉やトウヒの薄い板でできています。

■はじいて発音する仕組み 図2



チェンバロが印象的な作品・・・ J.S.バッハ: イタリア協奏曲、平均律クラヴィーア/F.クーペラン: 恋のうぐいす/G.フレスコバルディ: トッカータ
監修: 吉川 茂(工学博士・九州大学大学院 芸術工学研究院教授)/大塚 直哉(東京芸術大学 音楽学部准教授)